

巻頭言

南野浩則

2020年初頭から世界規模で始まりましたCOVID-19の影響は福音主義神学会の働きにも及んでしまい、『福音主義神学』51号の発行が1年延期となりました。そのような厳しい状況乗り越えて改めて本号を出版できましたことを主に感謝するとともに、神学会会員のご理解とご協力の賜物であるとみなさまに謝意を表したく存じます。本誌の編集委員会としては、このパンデミックの状況を見放すものではないと判断し、本号で「コロナ禍をめぐる諸課題」という主題を設定いたしました。

COVID-19のパンデミックは社会的なインパクトをもたらし、私たちのライフ・スタイルの見直しを迫ることになりました。デジタル・システムの進展とも相まって、リモートによる会議や情報交換は当然と考えられるようになっていきます。リモートという概念が私たちの生活に根付き始め、人々の関係性にも形として表れています。また、潜在的な社会の矛盾がパンデミックを通して顕在化してきました。例えば、いわゆる「ソーシャル・ディスタンス」によって、社会的弱者に対する支援が機能しない事態が散見されます。経済活動の制限によって、生活の困窮を経験する人々が多数います。ワクチン接種をめぐる、経済的先進国と発展途上国との格差は明確になっています。アジア系の人々への差別が顕わになった国々があります。ポスト・コロナの時代がやってくる中で、コロナ以前に戻る事態がある一方で、元には戻らない事柄もあるでしょう。もちろん、COVID-19の感染危機が世界のすべてを変えてしまうことはありません。しかし、パンデミックの経験というクッションをはさみながら、私たちはこれからの世界を模索していくことも事実でしょう。むしろ、パンデミックから学び、次の時代にそれをどのように生かすことができるのか、これが課題であると言った方が正確かもしれません。苦しい状況が過ぎ去って良かったと

いうことで済ましてしまうのか、パンデミックを通して見えてきた社会的な矛盾を克服する試みに努めていくのか、私たちの選択は未来や次世代に対して重要であると考えます。

COVID-19 のパンデミックは、キリスト教会に集う圧倒的多数の人々にとって未経験の「疫病」という出来事であり、困惑と労苦をもたらしています。そこには2つの意味を見ることができます。第1は、感染防止にともなう実際の対応です。人々の物理的・身体的な接触を制限することが当然となり、教会堂に人々が集まることが突如として難しくなりました。これまで通りに集まることを決断した教会がある一方で、集まらない（あるいは、集まることを著しく制限する）ことを決めた教会もあります。各々の決断そのものに時間と労力が割かれ、精神的な負担が強いられました。また、人的交流が困難な状況の中で、教会の方々の交わりや互いの関係性をどのように維持できるのか、この重大かつ緊急の課題に教会は直面してきました。リモート・システムの活用、それを利用できない教会の方々への連絡の工夫など、さまざまなことを教会は行ってきたと思います。そこには語りつくせない苦労があるはずですが、第2は、そのような実際の対応への意味付けです。例えば、身体的な近接を制限するという社会的な圧力の中で、集まることを決断した教会はその意義について答えなければなりません。集まらないことを選択した教会は、教会の伝統を覆したことに對して何らかの説明が求められます。キリスト教会は自らが聖書、神学、伝統という基盤の上に成り立っていると意識してきました。何らかの重大な変更・変化を迫られるときに、教会は以上の基本的な要素からその変更・変化を意味付けしようとし、この意味付けは面倒な作業ではありますが、人間ではなくキリストが頭である教会にとって不可欠です。COVID-19 の感染拡大以降、パンデミックに関する著作がキリスト教会から発せられています（翻訳された書物が多いようですが）、立場が互いに違う方々が意見を交換する場も設けられてきました。このような試みは、神学的な議論だけでなく教会の現場にも影響を徐々に与えていくことになるでしょう。そのように考えていきますと、パンデミックに対する意味付けについて、真摯で責任を負うことのできる議論を進めていく必要があります。

本号の狙いは、そのような神学的な議論の一端を担い、教会の現場に貢献することです。執筆者のみなさまには部門別に神学的な議論を進めていただいています。組織神学からは、藤本満氏と瀧浦滋氏が聖餐について各々の見解から議論しておられます。聖書神学として、鎌野直人氏が詩篇の講解を通してパンデミックの意味を語って下さっています。金井由嗣氏は歴史神学の観点から、疫病を経験したキリスト者について述べておられます。実践神学の分野から、岡村直樹氏がコロナ禍における神学教育の課題を扱って下さいました。

本号のもう一つの課題は、福音主義神学会の発足 50 周年を記念することです。これも本来は昨年に扱うべきことでしたが、1 年間の延期になってしまいました。すでに述べましたように、神学は教会にとって重要な土台です。福音主義の立場から神学について研鑽を積んでいく機会が与えられているのは、主からの賜物であり、草創期から現在に至るまでに神学会に関わってこられた方々の努力の結実でもあります。また、聖書学や神学は進展を遂げており、その内容は変化してきました。この現実の世界に働きかける宣教に仕えていくためには、その変化も必要とされたように思いますが、福音主義の定義が求められるような時代になっています。福音主義神学の未来は予定調和ではなく、開かれています。そのような状況において、過去に福音主義神学会が経験してきたことを知る作業は大切です。それは懐古主義ではなく、現在において自らが立っている位置を知ることであり、これまでの方向性を確認することです。主の恵みは歴史の中に刻まれてきました。神学作業も歴史の積み重ねとして過去から現在につながっています。福音主義神学会の業績は主の恵みの結果であり、それを未来に対して生かす責任が現在の神学会に委ねられています。

本号において、エッセイの形で3人の方々から寄稿していただき、50 周年の記念としています。東部部会からは大瀧信也氏、中部部会からは松浦剛氏、西部部会からは橋本昭夫氏、各氏が福音主義神学会との関わりについて述べて下さっています。

最後に、デイモン・チャ氏と永江桂子氏の連名によります投稿論文「予型論への認知的アプローチ」を掲載しています。聖書解釈の予型論を現代的な視点

で意義付けている内容になっています。

本号で扱いましたパンデミックの状況がいつどのような形で収束するのか、まだまだ見えません。また、収束後にどのような課題がこの社会や教会に残されていくのか、それを見定めることも難しいと言えます。しかし、主はこの世界に救いの業をもって関わり続けてくださり、平和と正義を遂行なさろうとしています。教会や宣教の現場での苦闘は続きますが、主の導きを期待したいと思います。それは神学的な作業においても当てはまることです。読者のみなさまの働きや聖書学・神学の研鑽において、主の意志が成るように願い、祈りをささげるものです。

(学会誌編集委員長)